

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：38001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01207

研究課題名(和文) 生き方としての基地反対運動 - ジュゴンの里づくりと命の民主主義に関する人類学的研究

研究課題名(英文) The Anti-Base Movement as a Way of Life: Making a Home for Dugong and Democracy for Life

研究代表者

比嘉 理麻 (Higa, Rima)

沖縄国際大学・総合文化学部・准教授

研究者番号：00755647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、沖縄県名護市辺野古の基地建設の進行に伴って、熾烈化する抗議行動の最前線で、日本政府の暴力を受け、心身に傷を負い、抗議に行けなくなった人びとが、新たに勝負できる領域を模索するなかで見出した、<生き方としての基地反対運動>とでも呼びうる動きを積極的に掬いあげることを目指した。日本政府の暴力によって、従来の運動の限界に立たされた人びとが、これまでとは異なる闘い方を見出し、自らの生き方を通して変革の方途を切り出していく様が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、名護市辺野古で、基地建設が強行されている状況で生じている、新しい基地反対運動の展開を明らかにすることで、一活動家に限定されない、多様な動植物の生や地域住民の暮らしや生き方と一体となった運動の射程の広さを可視化し、地域社会の平和と野生動物や自然環境との共生の道を模索するものである。その意味で、本研究の成果は、文化人類学や動物論、ならびに環境倫理学に対して学術的意義を有しているとともに、社会的意義を同時に持つものである。

研究成果の概要(英文)：As construction of a new military base progresses in the Henoko district of Nago, Okinawa Prefecture, there are people who have been physically or emotionally hurt and no longer able to protest on the front line of the intensifying opposition movement. This studies explored the emergence of a new movement, which might be called the "anti-base movement as a way of life", discovered by such individuals as they seek new domains of resistance.

研究分野：文化人類学

キーワード：基地反対運動 自然保護 米軍基地 環境問題 社会運動 人間と動物の関係 沖縄

1. 研究開始当初の背景

申請者は、2017～2019年度の科研・若手研究(B)「沖縄におけるジュゴン保護と基地反対運動に関する人類学的研究」において、名護市辺野古において、ジュゴン保護と基地反対の運動が連動して成立する歴史的経緯に着目し、環境破壊への抗議・ジュゴン保護と一体となった反軍事運動がもつ繋がりと分断の論理を明らかにしてきた。しかし、同研究の現地調査の過程で、申請者は、基地建設が進む状況下、運動に従事する人びとが以前とは大きく異なるかたちで、反軍事・反基地の運動を模索し、新たな活路を見出していく現状を目の当たりにした。具体的には、基地建設の強行にともなって、熾烈化する抗議行動の最前線で、日本政府の暴力により、心身に傷を負い、抗議に行けなくなった人びとが続出しており、そこで新しい基地反対運動が生成しているのである。本研究では、国家暴力の記述という喫緊の社会的要請のもと、その暴力を避けながらも、それに屈しない市民的抵抗やより広い社会変革の可能性を、草の根のフィールドワークをもとに記述・考察する必要性を感じた。

しかし、従来の文化人類学では、基地反対運動の研究蓄積が極めて乏しく、こと沖縄を対象とする基地反対運動の研究となると、ほぼ皆無に等しい状況にあった。さらに、環境破壊をともなう基地建設に対する異議申し立てや抵抗に関する研究は、極めて稀であった。また、自然環境や動物と人間の関係を主題とする人類学の人と動物の関係論は、世界各地の狩猟や家畜飼育の民族誌的事例から、自然と社会の二分法、そこでの人間中心主義的な序列化を批判し、動物の主体性や人格を認め、一大潮流を築いてきた。しかし、人間中心主義批判の議論において、基地建設や戦争といった軍事行動にともなう動物の犠牲や人格が取り上げられることはなかった。一方、反基地・反軍事論においても、動物の問題が正面から論じられることは極めて少なかった。最近になってようやく、戦争や軍事産業における動物の犠牲を扱った歴史学の研究が現われたが、反基地・反軍事の運動と一体となった野生動物保護の現代的展開を捉えた研究は、未だ見られなかった。

以上の研究調査対象の新しい状況と、研究学説史上の「空白」が、本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで申請者が沖縄本島・辺野古で研究してきた基地反対運動と結びついたジュゴン保護活動を発展的に主題化し、基地建設の進行にともなう人びとが口にするようになった「これは、政治じゃない」という言葉に耳を傾け、熾烈化する抗議行動の最前線で、日本政府の暴力により心身に傷を負い、抗議に行けなくなった人びとが、新たに勝負できる領域を模索するなかで見出した、〈生き方としての基地反対運動〉と呼びうる動きを積極的に掘り上げることにある。基地反対の苦境の只中で、萌芽している新しい基地反対運動の思想と実践を記述・解明することで、自らの「生き方」というより根源的な次元で、反軍事・反基地の運動を捉えることが可能となる。

本研究では、既存の「政治」で打ち捨てられた人びとが、基地反対を「非政治化」し、自らの〈生き方として展開する新たな社会・環境運動〉と、環境内存在すべてに開かれた「命の民主主義」の実践をモデル化し、広義の自然保護活動との関連で理解し、新たな理論モデルを提示することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、これまで申請者が調査研究を蓄積してきた沖縄地域でフィールドワークを行うことにより、事例研究を積み重ね、その理論的な枠組みを構築するために、以下の具体的な研究調査の方法を実施した。

まず、初年度の2020年度は、近年の辺野古「軟弱地盤」問題に伴う、基地建設計画の変更点および、沖縄県自然保護課の政策や条例改正等の資料収集を行なった。次に、沖縄本島北部を中心に活動している、環境NGOやNPOの活動の現地調査に着手した。既にラポールを築いているジュゴン保護団体での参与観察を行ない、その代表者や参加メンバーに聞き取り調査を実施した。

次に、2021年度は、辺野古の海の生き物とその生息環境を守り、破壊と変化を記録し、伝え広めている活動家や団体に射程を広げ、従来の型の基地反対運動をやめた経緯や、新たな活動理念、具体的な活動について、参与観察とインタビュー調査を実施した。

具体的には、貝類学者と文学者による「貝の言葉」を聞く講座、サンゴ移植活動、抗議船元船長らのエコ・ガイドや、アジサシ(海鳥)の激減と子育てを見守る活動、日本自然保護協会と地域住民の協働による自然保護プロジェクト、エコ・ツーリズム団体の海洋保全活動を対象とした。さらに、環境NGO間の協働や、漁協や漁師、エコ・ツーリズム団体との交流に目を向け、連携して開催される「自然の浜歩き」に参加し、人びとの繋がりや協働の新しい形を析出した。

最終年度の2022年度は、上記の調査研究のデータを踏まえ、その補足調査を遂行しつつ、事例研究を総括する理論研究を行なった。くわえて、調査研究成果を日本文化人類学会などの学術雑誌に投稿し、積極的に公表するとともに、一般読者を想定した雑誌『現代思想』やインターネットでの情報公開を行ない、より広い研究成果の発信・公開を行なった。

4. 研究成果

本研究の成果は、まずもって、「自然保護に根ざした基地反対運動の文化人類学」という独自の研究領域を切り拓き、これまで社会学を中心に行われてきた従来の基地反対運動研究に新規の知見をもたらした点にある。そこでは、狭義の政治運動として切り取るのではなく、より広く、沖縄の人びとの自然と共に生きる暮らしや生き方、というより生の根源から捉えなおした点で、極めて新規性・独自性の高い成果である(主要研究成果1:比嘉理麻「これは、政治じゃない - <生き方>としての基地反対運動と命の民主主義」『文化人類学』87(1):44-63、2022年、査読あり)。

さらに、本研究の成果は、基地反対運動を「人間のため」だけに担われているものとして、人間中心主義的に捉えるのではなく、環境内存在すべてに開かれた「命の民主主義」として捉える点をモデル化した点にある(主要研究成果2:『日本文化人類学会 第55回研究大会』2021年5月、『第36回日本解放社会学会大会』2020年9月、『動物と人間の関係懇談会』2023年3月他)。それにより、基地反対運動とは、狭い意味での政治的主張や人権を求める、人間のためだけの運動ではなく、命の根底的なつながりを足場に、動物や植物、生きとし生けるものすべてを包摂し、声なき、命の訴えに耳を傾ける「命の民主主義」の実践として、位置づけることが可能となった。

また、これまでの申請者の家畜研究や動物研究で培ってきた動物の独自の理論的・民族誌的知見と、今回、本研究で新たに築いた、基地建設にともなう環境破壊や野生動物の絶滅に対する批判的視座を接続させることで、より広く動物種に加えられる暴力、すなわち、異種間暴力・支配の実態を解明し、理論化することができた。それらの研究成果を、学術雑誌への投稿にとどめずに、より広い一般市民層を対象とした雑誌『現代思想』にて公開し、研究成果の普及・社会還元尽力した(主要研究成果3:比嘉理麻「動物嫌悪と肉食主義の共生成 - いのちと再び出逢い直すために」『現代思想』50(7):161-172、2022年)。

以上、本研究で解明・公開した研究成果は、従来の人文社会科学の社会運動論や、環境問題・基地問題研究の枠組みを豊かに塗り替えるだけでなく、現代世界の喫緊の課題であるSDGsと真の意味で響きあうものである。その意味で、人新世の時代要請に、理論的・実践的に応答する研究成果が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 87(1)
2. 論文標題 これは、政治じゃない <生き方>としての基地反対運動と命の民主主義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 85(1)
2. 論文標題 【レビュー】シンジルト・奥野克巳編 『動物殺しの民族誌』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 160-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 50(7)
2. 論文標題 動物嫌悪と肉食主義の共生成 - いのちと再び出逢い直すために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 161-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 181
2. 論文標題 豚とともに生きる - 戦後沖縄の豚肉食文化の再生	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 24-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 豚たちの戦後史 - 激変する人と動物の関係と沖縄社会 -
3. 学会等名 日本農業史学会シンポジウム 戦後沖縄農業・農村史研究の再検討
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 <生き方>としての基地反対運動 - ジュゴンの里づくりと「貝を手渡す」平和運動
3. 学会等名 環境問題の社会史的研究班
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 Not In My Back Yard - 「におい」が「異臭」に変わるとき
3. 学会等名 「汚穢の倫理」研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 これは、政治じゃない - <生き方>としての基地反対運動と命の民主主義
3. 学会等名 日本文化人類学会 第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 沖縄における人と動物の関係論 - 辺野古周辺の海の生き物たちの運動 -
3. 学会等名 動物と人間の関係懇談会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 ポスト・ヒューマニズムの「政治」運動 - 沖縄・辺野古の基地反対とジュゴン保護の絡み合い
3. 学会等名 日本解放社会学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 比嘉理麻（野林厚志編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 692
3. 書名 世界の食文化百科事典	

1. 著者名 比嘉理麻（河合利光編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 時潮社	5. 総ページ数 232
3. 書名 食の世界を生きる - 食の人類学への招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

リサーチマップ
<https://researchmap.jp/higarima>
沖縄国際大学研究者データベース
<https://www.okiu.ac.jp/gakubu/sogobunka/teacher/rima>
沖縄国際大学総合文化学部
<https://www.okiu.ac.jp/gakubu/sogobunka/teacher>
リサーチマップ
<https://researchmap.jp/higarima/>
沖縄国際大学研究者データベース
<https://www.okiu.ac.jp/gakubu/sogobunka/teacher/rima>
沖縄国際大学総合文化学部
<https://www.okiu.ac.jp/gakubu/sogobunka/teacher>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------